

Keyword:「留学」「異文化理解」「価値観」「違い」「生活習慣」

1. はじめに

私は、2022年10月～2023年7月の約9ヶ月間フランスのトゥールーズに留学していた。その中で私は、異文化を理解することとは、果たしてどういうことなのかについて身を持って学んできた。私は留学前、「異文化理解」とは、単純にその国の習慣や価値観の「違い」を知ることなのだと思っていた。インターネットの普及が進んだ今、日本にいても他の国の文化について様々な情報を得ることができるようになったので、私は日本にいても容易に異文化理解ができるものだと思っていた。そんな考えを持っていた私自身の留学体験から考えた「異文化理解の本当の意味」を、フランスと日本との文化の相違点を中心に記していこうと思う。

2. 序論 (留学に行こうと思ったきっかけ)

そもそも私が留学をしようと決断した1番大きなきっかけは、中学3年生の時の英語の先生にかけてもらった言葉である。当時は留学そのものに憧れはあったが、自分が留学に行くイメージは全く持てなかった。そんな中、中学校の卒業式の時に当時の英語の先生に言ってもらった「日本だけにとどまらず、もっと広い世界を見ていろいろな人に触れて生きていきなさい」という言葉がずっと自分の心の中で引っ掛かっていた。それとほぼ同じ時期に、私はたまたま流れていたフランスのニュースを目にした。そこでは、フランスでのアニメや漫画ブームが加熱し日本文化に関心を持つフランス人が増えているというニュースだった。それを見て私は、日本と大きく異なるであろうフランスの文化に興味を持ち実際に肌で感じてみたいと思ったのと同時に、フランスの人々が日本に対してどのようなイメージを抱いているのかを生々の声で聞いてみたくなった。また、国際高校で個性豊かな友達や先生方、日本に来てくれた留学生の子たちと関わることによってもっといろいろな人と関わってみたい、いろいろな世界を知るきっかけにしたいといつしか思うようになっていたのも大きなきっかけとなった。加えて、自分の大きな挑戦を後押ししてくれるたくさんの方々の存在も自分の中でものすごく大きなチャレンジを決断できた要因でもあると思う。自分がこれまで暮らしてきたものとは全く違う環境で過ごすことによって、異なる世界・文化を自分の目で見てみたい。そして、それを今後の自分の人生の中での大きな経験・ステップにしたい。自分自身の視野を広げ、自分の中の何かを変える1つのきっかけにしたい。そんなことを考えていたある日、学校でAFSという留学団体の案内を頂いた。AFSとは、第二次世界大戦の時に戦争に参加していた兵士の救護輸送をするボランティア団体として設立され、現在では「世界平和」を理念に高校生に異文化学習の機会を提供する団体として、世界100カ国以上の生徒の留学を支援する活動をしている。そんな活動理念や留学に対するサポート体制を聞き、この団体でなら留学に踏み出せると思えたのも自分の中で1つ大きなきっかけになった。このような理由で、私はフランスへの留学を決意し、渡航することになった。

3. 本論

I (学校生活の違い)

そうして実際にフランスに飛び立ったが、1番大きな違いを感じたのは学校生活だった。ここでは現地での学校生活について記そうと思う。時間割は日本のような1日きっちり7時間授業のようなものとは違い、大学のように授業がない時間(いわゆる空きコマ)がところどころあった。基本的に授業の選択の自由度は日本より断然高い。オプション授業を選択することができ、第3外国語や体育、音楽や映画の授業を選択することができる。もちろん必修の授業もあるが、人によって時間割は少し違うことが多い。また、HRクラスの教室はないので全授業移動教室である。そして、水曜日の午後は授業がなく友達と遊んだり自分の趣味に費やしたりする時間を持つことができる。昼食の時間は、学校内の食堂で食べることも家に帰って食べることも可能なので、家が近い人は1度帰宅し、お昼を食べてから再登校することも多かった。食堂の昼食は1食約650円のため、かなりお手軽に食べることができる。フランスの高校では、全教室にプロジェクターとパソコンが装備されていて、先生方はそれらでプリントや資料などを前に写しながら授業が進んでいた。教科書は基本的に1人1台配布される小型パソコンで見ることが出来るようになっており、紙の素材が欲しい人は図書館に全学年の全教科の教科書が揃っているので、それをコピーして使っている人もいた。現地では、成績のつけ方もまるで日本とは違った。日本では知識技能、主体性、思考判断などの観点別に評価をつけることが多いが、フランスではテストの点のみで成績が評価される。また、教科の1年間の平均点が6~7割ほどないと進級ができないため留年している人も少なくはなかった。そのため、授業中は生徒たちの質問が飛び交い、なおかつ先生が出した問いについて手を挙げて自分の意見や答えを発言する意欲的な生徒が日本よりも断然多いように感じた。それに加えて、自分から活動する活発な生徒が多いので、頻繁に生徒間でストライキが起こっていた。授業時間の改正やテスト廃止を訴えるデモが生徒の間で起こり、1日授業が無くなることも少なくはなかった。また先生方にもデモに行く権利が認められているため、先生方の都合で授業がなくなることもよくあった。特に、2月頃に起こった年金に関する法律の改革にはご年配の先生方を中心に反対する人が多く、デモに行かれる先生方も数多くいらした。校則は、ほとんど存在しなかった。しかし、先生の話や携帯をいじったりゲームをしたりする生徒はしっかりと先生に叱られていた。さらに、日本ではおそらく校則としてはほとんど存在しないものでフランスに唯一存在した校則は、授業中にガムを噛まない事である。未だ何故そのような校則が存在したのかは正直分からない。日本では服装や髪型など細かく校則が決まっていることが多いが、フランスでは基本的に他の人に迷惑をかけなければあとは自己責任の世界のため、何も言われなくてもほとんどだ。また、現地では先生と生徒の間の距離も違う。日本は比較的生徒と先生の距離が近く、個別補習や個別面談にも対応してもらえが基本的にフランスでは先生との距離が遠いことが多い。例を出してみると、大学教授と大学生といったイメージが近いだろうか。何人かの先生方に自分の初心者用フランス語講座に付き合っていたが、実際にはこのようなケースは稀であり、もし質問があるとすれば基本的に授業内で解決し納得することが基本的なマナーみたいな物らしい。

II (家庭や生活の違い)

続いて、現地の家庭や生活について論じようと思う。まず、共働きの家庭は日本より多いように感じた。専業主婦の人は少なく、両方とも働きながら家事もこなしているご夫婦が多かった。実際に私がホームステイさせて頂いたご家庭も共働きのご家族だった。そのため、基本的に家族が帰る時間がバラバラなので、早く帰った人から率先して家事を行うことが多かった。また、誰かがやってくれた家事には絶対に感謝の言葉をかけるという暗黙のルールが存在していた。そのた

め、男性の家事への参加率は日本に比べて遥かに高い。加えて、食事の時間は日本よりも圧倒的に長い。日本はどちらかというご飯は早く済ませる家庭が多いように思うが、フランスはご飯を食べながら今日あった話や世間話などをかなりじっくり話しながら食べる習慣がある。特に夕食は、1日の終わりに家族と面と向かってゆっくりと話せる時間なので、基本的に2時間はかかることが多かった。お昼ご飯も、多くの生徒は学校内にある食堂で食べる人が多いので、仲のいい友達と何人かで集まって授業や課題の話をしながら食べることも多かった。他にも、フランスは日本に比べてご近所付き合いなどの地域のコミュニティとのつながりを大切にする人が多いという印象を持った。その例として、金曜日または土曜日の夜は、ご近所の方に加えてお友達や親戚の人も招いて、ホームパーティーが開かれることがよくあった。もしそれがなかったとしても、金曜日の夜は学校終わりに家族で映画を観に行ったり、友達の家遊びに行ったりと普段あまりできない「非日常」のような事をするのがほとんどだった。さらに、日本と比較してフランスはバカンスが多くあり、7週間(約1ヶ月半ほど)学校に行ったら、その後2週間ほどの休暇が与えられていた。また、夏休みは7~8月のほぼ丸々2ヶ月ほど休みがあった。そこで私は普段行けない少し遠い街に出かけてみたり、地元の美術館に足を運んでみたりした。普段の学校生活は朝の8時に始まり、長ければ18時半まで学校の授業があったため、なかなか平日にゆっくりと休みを取ることが出来なかった。そのため、このようにゆっくりと休みを取れる時間が多くあったのはよかったことだと思う。

Ⅲ (現地で行った日本文化を伝える活動について)

フランスには、日本の文化に興味を持ってきている人が多く、それらを紹介する機会が多くあった。この章ではそれらのことについて紹介しようと思う。私は、現地の学校で取らなければならない第二外国語の授業に、日本語を選択した。自分が生まれ育った国の言語や文化をフランスの生徒に伝えられる機会が持てる上、改めて自分の国のことを客観的に見つめ直す機会にもなると考えたからだ。実際に、私は日本語の授業内に加えて他の学年の生徒にも日本の文化についてプレゼンテーションする機会を頂いた。一言に「文化」といってもものすごく幅が広いので、私は学校生活や部活動など、現地の学生の日常生活により近い内容かつ、彼らが学んでいるトピックに近い物を選んで発表した。具体的に説明すると、私が所属していた1年生では日本の学校生活や校則について学ぶ単元があったため、実際に日本の学校の様子や部活動についてプレゼンテーションをさせてもらった。また、1年生には1時間折り紙をレクチャーする時間も頂いた。前で私が折り方を簡単な日本語で説明し、それに合わせて生徒が折っていくという方式で、実際に紙飛行機を折ってもらった。折り終わった後には、学校の庭みたいところで実際に紙飛行機を飛ばし合い、誰の紙飛行機が一番飛ぶかの大会も行った。2年生では、日本の観光地について学びそれをまとめて発表する時間があり、生で生徒の発表を聞かせてもらった。その後、実際に自分が生まれ育った奈良の観光地についてプレゼンテーションをさせてもらった。かなり細かく奈良のことを伝えることができたので、後に生徒達に聞くと、知らなかったことが多くて新しい発見ができたと言ってくれた学生がとても多く、自分としても嬉しかった。3年生ではもっと難しいトピックを勉強しており、「日本とフランスの男女格差の違い」について勉強している、との事だったのでそれについての自分の経験に加えて、日本のデモの現状についても話をさせてもらった。実際に企業が行っていたアンケート結果などのデータを引用し、少し踏み込んだ内容までお話しさせてもらった。彼らにとってはリアルな話はなかなか聞いたことがなかったため、フランスとの違いも知れて興味深かったと言ってもらった。他にも、「トゥールーズジャポン」という住んでいた街と日本の親善団体にもよくお邪魔させてもらっていた。ここでは毎週金曜日に、日本のことに興味があるフランスの方と日本から留学している私のような人が集まり、コミュニケーションがとられていた。日本語やフランス語をそれぞれが教え合い、またそれぞれの文化や違いについて知ることができるため、私にとってはとても有意義な時間になっていた。私はこの団体でも、1度だけだったがプレ

ゼンテーションをさせてもらった。ここでは私の故郷である「奈良」をテーマに、場所や気候、人口の話から始まり観光地や鹿の話、名産品の話もさせてもらった。団体の会長さんにもお越し頂き、奈良への関心が今までよりも高まったと言って頂きとても嬉しかったのを覚えている。しかし、意見の中で1番多かったのは、日本文化に対して少なからず思い込みを抱いていた点があった、という意見だ。彼らにとっては、日本の文化はとても格式が高いものだというイメージがあったらしく、いい意味でそのイメージがプレゼンテーションによって覆されたという意見が多かった。

4. 結論

本論で述べたように、私はフランスで様々な経験をしたことによって、日本の中にいるだけでは感じることはできなかった様々な違いを発見することができた。数多くの発見をした中で、私は本や映像で見たり聞いたりしたことと、実際に身を持って感じる文化には大きな差が生じるという事に気づいた。加えて、限られたイメージやステレオタイプのみに基づいて意見を言ったり、事実とは異なった固定概念を持っていたりする人は多いのだなということも感じた。留学に挑戦する前は、現地に行かなくても他の国の文化のほとんどを理解することができると思っていたが、行ってみたことによってイメージ映像や写真、インターネット上の書き込みなどで、全ての事実を掴むことはおそらく不可能に近いということを実感した。現地に行って身を持って文化等を学ぶことが、本当の「異文化理解」に何よりも必要な要素だと痛感した。

5. おわりに

この1年間の経験を基に私は、今後まだまだ世界にたくさんある文化の裏側やリアルを知っていきけるような人になっていきたいと思う。グローバル化がますます進み、海外の人との関わりが増え、さらに他国との結びつきが強まるこれからの時代では、偏見や思い込みがきっかけで対立や人種差別も起こりやすくなる世界になっていくと私は考える。そんな時代に、先入観やイメージだけで物事の全てを判断してはいけないと私は考える。相手をリスペクトし、バックグラウンドまで理解しようとする心持ちを大切に、これからの人生を歩んでいきたいと思う。